論文題目：　大江健三郎文学に於ける「かたり」の戦略 ― 『個人的な体験』を中心に ―

申 請 者　四方　朱子

論文要約

本論は、大江健三郎が１９６４年に発表した『個人的な体験』が、いかにモノローグ的な語りを用いてその「個人」性を効果的に担保しているかを論じつつ、この小説後の大江健三郎の小説が転機を迎えるダイナミズムを、多角的に考察した。特に、「私小説」ではないと語りつつも、「私小説」性を担保しているふるまいに、どのような戦略があるのかを、大江の小説の語りと、構成を中心に分析した。

大江健三郎の小説は、文壇デビュー当初から、江藤淳などの大物評論家らが、率先して追認して評したことも追い風となり、大江作品への批評自体が、大江自身の主張やその公開した部分のライフスタイルに振り回され、その枠に沿った批評か、むしろ逆に、作品自体ではなく、作者大江健三郎という有機的な存在の思想やライフスタイル自体への、反論じみた批判より外部に発展しないような傾向も見られてきた。そのような批評は、メインキャラクター＝作者「大江健三郎」という図式や、それに陥らないまでも、大江本人の私生活と対照して、本人のモラルや価値観、世界観をもってして、小説を評価し、限定してしまうことになるのだが、今回中心的に用いる『個人的な体験』は、特にそのような批評にさらされた大江テクストの一つであると言える。ここでは、このテクストが、そもそもなぜそのような傾向をもって語られてしまうのか、また、そう語られることをテクスト自体がどう利用しているのかを、テクストの語りを中心に分析することで整理した。

第一章では、初期短編「他人の足」を取り上げ、「他人の足」に於ける障害者表象、すなわち、障害者がどのように「描かれて」いるかではなく、このテクストが障害の当事者というアイデンティティからの発話を採用し、語り手自身が障害の当事者であるという独自性に焦点を当てた。更に、このテクストでは、発表当時の１９５７年には、限りなく不治に近かった「脊椎カリエス」という病が、不治ではなくなって来ていたというそのダイナミズムが、巧みに物語の転機として取り入れられていることを指摘した。しかし反面、この実在の障害は、一方でテクストに表象されるものとして、差別的な象徴性を残したままであり、たとえば、彼らの下半身が自らの意思では動かず、その障害を持つ集団の一員である限り、彼らの純潔な関係性は守られる要因として描かれているに過ぎず、そこに横たわる問題性や差別的な外部からの視線について顧みられることがない。つまり、脊椎カリエスという障害は、このテクストに於いては、比較的象徴的、比喩的な集団を示す記号の枠を出ているのか、脊椎カリエスの「当事者」それぞれの個性の表出に至っているのかに関しては、疑問の残るものでもある。

第二章では、このような一般化から脱する為に、テクスト自体が、集団になりきれない個を描き出そうとする過程と、それに伴い、差別性を持ってしまう可能性について、大江健三郎が２７歳の時に発表された彼の中期の代表作の一つである『個人的な体験』の語りにまず目を向け、このテクストが「他人の足」とは異なり、三人称で語られているにもかかわらず、モノローグ的な性質を多分に持つものであることを確認した。『個人的な体験』は、〈鳥〉の主観的な視点からの周囲の描写が続き、〈鳥〉に共感するか、もしくは、少なくともその主観的視点を受け入れずに読み進めることはできないような構造を持つテクストである。そして、そのモノローグ的な語りが、固定された価値観を持っており、それが同性愛者や女性を「強姦する」力を持ち得る男性性のヒエラルキーに依っており、それを崩すことが出来ていないことを示し、「道徳」小説ぶりが批判対象となってきたこのテクストが、なぜそのような批判を引き受けてしまうのかを、あえて大江健三郎という生身の作者の情報を導入せず、その語りがはらむ、差別的ヒエラルキーを整理することで分析した。

第三章では、『個人的な体験』の２年前に発表された短編「不満足」をとりあげ、「不満足」という一つの閉じられたテクストが、『個人的な体験』というテクストによって、「不満足」というテクストは、

そのイメージを変化させることはなく、むしろ「成長」というイメージが後発の『個人的な体験』で改めて確認されることにより強化されると述べられがちであることに注目した。「不満足」と『個人的な体験』という２つのテクストは、結果論的に、「不満足」によって『個人的な体験』を補完する関係として取り扱われがちであり、それによって取りこぼされてしまう「不満足」の独自性に注目し、特にその語りが、第一部から第二部に移る過程で、一人称から、三人称へと移行する点を指摘した。そして、署名された作者、大江健三郎の発言という、一見有機的なつながりによって後押しされて、大江自身によるこの２つのテクストへの自己言及＝自己解説は、事後的な意味付けという意味で、まさに「不満足」での〈鳥〉による〈少女〉の「強姦」と相同的な言説となっていることを指摘した。

第四章では、再び『個人的な体験』の構成に注目し、第二章のモノローグから取りこぼされた〈火見子〉に焦点化された語りに注目し、従来無視されるか、エラーとして扱われがちであった、その語りのブレと、〈火見子〉の語る「多元的宇宙論」を交差させることで、その一瞬の焦点化のブレが与える読みの可能性について分析した。また、同様の語りの焦点化のブレを持つ田山花袋の『蒲団』の需用のされ方を比較検討することで、『個人的な体験』が、殊更、自らの小説を「私小説ではない」と語りつつ、返す刀で、たとえば「光、アカリのモデルとなった息子ですが」等と語るなど、私生活に身近に絡むものをモデルにしながら小説を書いているとアピールしながらも、その小説は「私小説」ではないと同じ文で繰り返すという戦略性を持つことから、『個人的な体験』が大江健三郎の転機的小説と言えることを分析した。

第五章では、前章までに、『個人的な体験』には、作者大江健三郎と同じ選択をした〈鳥〉という結末部に集中した読みの傾向があったことを確認してきたことを踏まえ、この結末とは逆に子供を殺してしまう父親が出てくる「空の怪物アグイー」という、『個人的な体験』の約半年前に『新潮』に発表された短編の存在について考察した。もっぱら大江の転換期と位置づけられることの多い『個人的な体験』というテクストの存在意義を、改めて近代文学の流れの中で捉え直したいと考えるため、夏目漱石の『こころ』と、ヘンリー・ジェイムズの “The Turn of the Screw” を援用し、それらを交差させつつ分析した。『個人的な体験』の発表後、大江は私小説に倣うかのような小説を多産することになる。これを、大江健三郎は日本近代文学への回帰といえる小説技法的「転向」ととらえて意味付けをした。

第六章では、それまでに展開してきた私小説という文学ジャンルを喚起させることで、作者であるという戦略を最大限利用し、公言しつつ自分の過去の作品を自己引用して語り直す手法を採る『懐かしい年への手紙』を中心に、この小説が『個人的な体験』を自己引用することについて分析した。『懐かしい年への手紙』に於ける自己引用は、テクストの様々な水準で自己の統一性を揺るがすこととも密接に関連している。このテクストを、モデル小説としてのみ、あるいはフィクション性にのみとらわれた視点から分析するのでは、このテクストの重要な意味を見落とすこととなってしまう。『懐かしい年への手紙』は、それ自身の存在によって、テクストとしての自身を解体し、さらにその解体の手付きをも露呈し、常に「読まれる／見られる」事を意識し続ける構造を持った循環するテクストとして、存在していることを指摘した。

第七章では、子供が大人からテクストの読み方を教育されるという手続きを取りつつ、そのテクスト自身が進行する形式を持つ『キルプの軍団』を中心に、自己引用だけでなく、外部の実在するテクストを自己のテクスト内で独自に読み替えつつ構築されるもう一つの物語が、どのように現実と絡み合うのかについて考察し、大江健三郎小説が、『個人的な体験』後、自らのテクストや、私小説的な自己引用などだけでなく、外部の世界すらそのテクストに引き込んで解釈してみせることで、有機的な多面性を持ち得る可能性を考察した。